令和５年度　多良中学校　校内研究計画

１　研究主題

「自ら学ぼうとする生徒を育成するための指導の工夫」

～知識・技能の定着と家庭学習の習慣化を図る取り組みを通して～

２　主題設定の理由

グローバル化や ICT の急速な進展により複雑で変化の激しい社会となった昨今，「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となること」が生徒たちには期待され，学校教育においては，「様々な情報や出来事を受け止め，主体的に判断しながら，自分を社会の中でどのように位置付け，社会をどう描くかを考え，他者と一緒に生き，課題を解決していくための力」いわゆる「生きる力」を生徒に育むことが求められている。新学習指導要領では，教育課程全般において育成すべき資質・能力の三つの柱として，ア．生きて働く「知識・技能」イ．未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」ウ．学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」が示されている。これらの資質・能力を育成する上で，生徒の自ら学ぼうとする姿勢は大きな関わりをもつと考えられる。

本校では，生徒の「生きる力」を育成するために，「郷土を愛し，自ら学び，仲間とともに伸びる生徒の育成」を学校教育目標とし，「知（確かな学力）・徳（豊かな人間性）・体（たくましい心と体）」を育むことを目指している。目指す生徒像として「自ら学び，共に高め合う生徒」「心豊かで，社会性のある生徒」「心身ともに健康でたくましい生徒」を掲げている。これらを実現するための教育活動は多岐にわたるが，共通実践の一つとして，「生徒が主体的・対話的に学ぶ，分かる授業を推進し，学力向上（特に知識・技能の定着）を図る。」ことを重点指導目標としている。本校では，これまで，学習に困難を抱えたり遅れが生じたりする生徒を置き去りにしないよう「わかる」授業を展開し，学び合いの活動を通して互いの考えを共有しながら個々の深い学びへとつなげることで，「学ぶことの意義や楽しさ」を感じさせ，生徒の自己肯定感を醸成することを校内研修で取り組んで来た。自己肯定感を醸成することが主体的な学びにつながることを期待し，「わかる」授業づくりと家庭学習の習慣化を図ることで基礎学力の定着を目指した。成果としては，県学習状況調査の結果から，思考・判断・表現力の向上に効果が見られた。一方，課題としては，「知識・技能」の未定着が挙げられている。原因として，「一時間の授業を漠然とした状態で終わっているため，何を学習したのか，何ができるようになったのかが曖昧」になっている生徒が多く，尚且つ，家庭での学習習慣が定着していないために「曖昧な知識・技能が整理されないまま，もしくは忘れ去られてしまっている状態」にあると考えられる。

本校生徒は，決められたことは素直に取り組む姿勢をもち真面目である一方で，普段の学習活動の様子や学習状況調査で県平均と比較して無解答率が高いことなどから，困難なことを諦めがちな実態ももち合わせていると感じる。先に述べた課題の改善のためには，「学習のめあてを意識させ見通しをもって取り組ませる」こと，学習の過程で「生徒自身が粘り強く課題に取り組み，気付き，学びの工夫をするような手立てをとる」こと，「その授業で何を学んだかを生徒自身の言葉で振り返らせる」ことが重要になってくるであろう。また，「生徒自身が自らの家庭学習への取り組みを調整し，習慣化できるような手立てをとる」ことも必要であると思われる。

以上のことから，本研究主題を「自ら学ぼうとする生徒を育成するための指導の工夫」とし，知識・技能の確かな習得と学び合い活動を効率的に仕組んだ授業を展開し，家庭学習と連携させ，生徒に主体的に学ぶ姿勢を身につけさせることを目標とする。

３　研究の目標

(1) 生徒が主体的に学ぼうとする授業づくり

授業においては，①生徒が身に着けた知識を活かし，主体的に学ぶ場面を設定する。②授業や単元の終末には「ふり返り」を行い，個別の知識を関連付けながら生徒自身の言葉で文章化させることで概念的知識として定着させる。③基礎学力の定着に向けた効果的な指導法を考える。この３つの柱で生徒の知識・技能の向上を図る。

（２）家庭学習の習慣化

生徒自身が自らの家庭学習への取り組み方を調整し，習慣化できるような手立てをとる。自主学習ノートをはじめとする各教科の課題の内容や量を検討し，授業と併せて，生徒の基礎学力定着に取り組む。

※　数値目標について・・・実力テストの知識・技能観点の正答率→２学期の結果を受けて３学期の到達目標を決める

４　研究の仮説

３つの柱を意識した授業改善と家庭学習の習慣化を併せて行うことで基礎学力が定着し，知識・技能を向上させることができ，自ら学びに向かう生徒を育成することができるであろう。

５　研究内容

(1) 生徒が身に着けた知識を活かし，主体的に学ぶ場面を設定する。

ア　明確かつ生徒の主体的な活動を促す工夫した「めあて」を提示する。

イ　生徒同士で教え合う，または意見交換により，考えを深めるなどの「学び合い活動」の時間を効果的に設定する。【グループ活動，ペア活動】

ウ　ICT を効果的に活用する。

(2) 授業や単元の終末には「ふり返り」を行い，個別の知識を関連付けながら生徒自身の言葉で文章化させることで概念的知識として定着させる。

ア　毎時間もしくは単元ごとに「ふり返り」の時間を設定し，生徒の学力に応じた「まとめ」(例：空欄補充型のまとめ，板書中のキーワードを使ったまとめ，ノーヒントのまとめ，など）を生徒自身が行い，一時間の授業で何を学んだかを明確化させる。「めあて」と整合性のとれた「まとめ」をさせる。

(3) 知識・技能の定着に向けた効果的な指導法を考える。

ア　授業開始時に前時の学習を復習する。定期的・計画的な小テスト・単元テストを実施する。
口頭での復習や，生徒同士で問題を出し合うなどの活動を伴う復習を実施する。

イ　ｅライブラリを活用する。

【授業の流れ】

	生徒の活動	教師の支援
つかむ	①前時までの学習を復習する。	授業の始めに前時までの学習を復習する。小テスト・口頭での復習・P.P などで行う。可能な限り，本時の授業との関連性をもたせることで本時の学びにつなげる。
	②「めあて」を書き，本時の学習すべき内容とゴールを把握する。	生徒の学習意欲をかりたてるような「めあて」を設定。(～を比べてみよう，～を友達に説明しよう，など。)
深める	③グループ活動，時間旅行などにより，考えを深める。	生徒が身につけた知識を活用し，主体的に学習できる場面を設定する。課題や「問」を設定し，協働により考えを深めさせる。
ふり返る	④「ふり返り」を書き，本時または本単元のふり返りを行う。	本時または本単元で学んだこと，感じたこと，疑問思ったことを書かせ，生徒の定着度を確認したり，次の授業で紹介したりするなどして活用する。

(4) 家庭学習の習慣化を図る。

ア　家庭学習の充実(各教科ごとの課題の内容と量の検討。自主学習ノートの活用法や宿題の工夫)を図り，学力向上につなげる。

イ　家庭学習チェックシートの有効利用と，生徒の変容を調査する。(Teams によるアンケート)

ウ　生徒への呼びかけと同時に保護者への啓発。

６　研究の方法

(1) 授業研究会による成果の検証

ア　１学期に１回，２学期に２回，授業研究会を行う。（理科１回，社会１回，数学１回）

イ　定期的に全体研究会を開き，研究の方向性を吟味する。

ウ　実力テスト等の知識・技能観点の比較・検証をする。

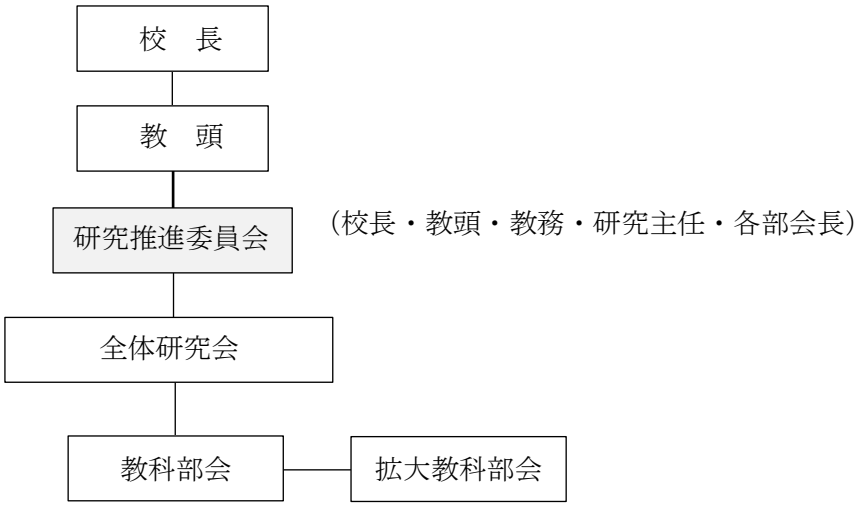
(2) 講師招聘および研究発表会への参加。

７　検証方法

(1) 授業やアンケート調査における自己評価や学習成果をもとに，生徒の学習状況の変容を検証する。

(2) 授業研究会を実施することで，研究仮説を検証する。

８　研究組織



各部会	研究内容
研究推進委員会	・研究の骨格・基本的事項を立案し，全体研究会に提案する。 ・講師招聘，授業研究会の企画，運営を行う。
全体研究会	・全職員で取り組む指導法について協議する。 ・各教科の連携を密にし，授業研究会を通して指導法等の研鑽を積む。 ・家庭学習の習慣化を図る。
教科部会	・年間指導計画の立案・検討を行う。
拡大教科部会	・研究主題に沿った研究授業の提案をする。（指導案検討会を含む。） ・県学習状況調査の分析

	拡大教科部会（指導案検討会）メンバー
A	中島こ先生，前田ゆ先生，相坂先生，　枳原先生，森田先生， （校長先生）
B	竹下先生，菰田先生，下村先生，百武先生，尾形 （教頭先生）

９　年間計画

	月　日	計画
第　１回	４月　２６日	校内研究提案
第　２回	５月　１２日	第１回校内研究授業（理科：相坂先生）
第　３回	６月　１４日	検討会
第　４回	８月　　１日	学習状況調査分析
第　５回	９月　　６日	第２回校内研究授業および授業研究会（社会：中島こ先生）
第　６回	１０月　１１日	中間検討会
第　７回	１１月　１５日	講師招聘による研修会
第　８回	１２月　１３日	第３回校内研究授業および授業研究会（数学：竹下先生）
第　９回	２月　　７日	各教科からの報告会（成果と課題）
第１０回	２月　２１日	校内研究まとめと次年度に向けて

※校内研究授業前，必要に応じて指導案検討（校内研修）の時間を設定する。
※１０月３日　事務所訪問　全先生方　公開授業